本道厚岸近海の鮭鱒族

江口　弘

北海道の太平洋沿岸、即ち厚岸地方に毎年四月から六月にかけて來游して來る鮭鱒族で産業的に價値のあるものは鮭、鱒、樺太鱒、紅鱒、鱒之助等の五種類である。これ等は又同地方でトキシラジ、ラシヤマス、イダマス、ホンマス、クチグロ、アオマス、セゴイマス、ヒゴイマス、ベニ、スケ、スケマス、ギン等と各種雜多な方言で呼ばれてゐる。即ち一地方の方言は必ず同一種を指さない事が多いものである。之等、鮭鱒の一般的な形態及び生態的な事柄について簡單に述べてみると。

(一) 鮭 Oncorhynchus Keta (WALBAUM.)

厚岸地方では「トキシラジ」と稱してゐる。これの一般的形態は体が稍々細くて、尾鰭は叉狀をなし、尾柄は低く、体色は背部が濃青綠色で体側面は銀白色を呈し、體に黑色の斑點はない。鱗は大形で剝離し易く尾鰭に銀色の放射線がある。鱗を通して淡灰色の雲紋を出現するものがある。雌雄は形態上、何等違いを認めない。本道の東北海區、東海區、及び東南海區、即ち北見、根室、釧路、十勝、日高及び擔振沿岸に毎年四月下旬から六月下旬至乃七月上旬に亘つて來游する「時不知」は、その漁期の推移よりみて、三陸沿岸方面から北上して來て、索偶洄游の過程にある鮭(O. Keta)であると推定されるもので、七月中旬ともなれば全く本道からその姿を消し其の後は主として樺太東海岸を北上して黑龍江方面より更に露領オホーツク海地方北部沿岸に行き、又一部は千島列島に沿つて北上し、北千島、カムサツカ西岸に至ると云はれてゐるもので、本道に於て、秋より冬にかけて來游し、河川に產卵床を求める鮭とは六月下旬或は七月上旬？即ち後期に出現して、その量的に僅かである外は關連がないと云はれてゐるが、以前、水產試驗場によつて行はれた「時不知」の標識放流の結果は、何れも放流地點より北方に於て再捕された事實と、漁期の推移より見ると特に厚岸では漁期の終りに近ずくつれて北上して漁撈に從事する事より、魚群が北方に向ふと云ふ事は推して知る事が出來る事實で、この北上に際しては單に魚群が通過すると云ふ事だけではなく、近海に相等な期間滯

泳を行ふものとするならば、或は魚群の一部は卵巣の充實と共にその近海の河川に遡上して産卵すると云ふ事も又想像される譯である。尚、當業者の言に依れば卵巣の充實したものが漁期の推移に從つて多く捕獲されると云つてをり、更にこの感を深くする譯であり、この點將來の研究に俟たれる所であろう。

二 櫻鱒 O. mikai (BIRDBOORT.)

厚岸地方では「イタマス」と稱してゐる。これは「時不知」と同じ時期に混獲されるもので又、「ホンマス」とも「クチグロ」とも稱してゐる。魚體は大小不同であるが、大形のものは概して雌が多く、特に体高が著しく高く、鰓蓋は背部より鈍く傾斜して尾柄の處で急に低くなつてゐる。體幅は狹く、板の様な感じを持つてゐる。「クチグロマス」は特に口のあたりの黑いものを稱し、「イタマス」にも「クチグロ」の形態を持つてゐるものもある。其の一般形態は頭部は鰓蓋に比較して小さく、かつ鈍圓である。鰓蓋は稍々圓味があつて、體色は背部は綠色を帶びた青黑色で、腹側面は銀白色である。背部、背鰭、尾鰭、脂鰭等には小さい圓い黑色の斑點が散在してゐる。背鰭の先端には黑色の汚點があり、鱗は稍々大きいが「時不知」の鱗に比較すれば小さくて直ちに剝離し難い。

三 櫻太鱒 O. gorbusha (WALBAUM.)

厚岸地方では「アオマス」と稱してゐる。これは同地方で捕獲される鮭鱒族の中で体型が最小のものである。背部は青藍色、体側は鮮かな青綠色を呈してゐる點、體色からつけられた名稱と考へる。其の他「セゴイマス」「ヒゴイマス」等とも稱されてゐる。其の一般形態は頭部が小さく、尾鰭の又狀は顯著で尾柄は細く上下兩頭が尖り、上頭骨の後緣は眼球下にあり、齒は下顎、口蓋骨、鋤骨及舌骨にあり、鱗は小形で剝離し易い。體には小形の斑點があり、特に後期に捕獲されるものは背部及び尾鰭に大形の隨圓形の斑紋を持つてゐる。特に後期に出現するものの雄は、第二次的性徵の出現によるものか背部が高まり、隨圓形の斑點の顯著なものが混在し、又、生殖巢が充實してゐる等の點からみれば、後期に出現するものの中には、本道、或は千島の河川に遡上するものがあるのではないかと想像される處がある。

四 紅鱒 O. nerka (WALBAUM.)

厚岸魚菜市場では「ベニ」と稱してゐる。これは「時不知」漁期の初期には混獲される事が少なく、「時不知」の盛期より捕獲盛んとなり終期となつて、こんどは紅鱒の漁期になる。其の一般的形態な著々「時不

知と似ていて、背部は蒼綠色、體側は銀白色で尾鰭に銀色の放射線がない。鱗は「時不知」より稍々大型で剝離し難い。當業者は鱗の剝離し難い點「時不知」と判別して區別してゐる。

四 鱒之介 O. tshawytcha (WALBAUM.)

厚岸地方では普通「スケ」或は「鱒之介」と稱してゐる。これは五月上旬より五月下旬にかけて、厚岸灣外の大黑島附近の建網でたまたま捕獲される。鮭鱒族中最も大きなものである。「時不知」の漁期間を通じて年々漁獲されるものは數十尾に過ぎないと云ふ。又産業的にも價値がなく、厚岸町民の食膳に供されるに過ぎない狀態である。其の一般形態は體は鮭に似てゐるが肥大し、他の鮭鱒族に比して頗る大きく、頭部は圓推形をなし眼形は小さく、齒は上顎、下顎、舌狀骨にあつて稍々小さいが鈍く內方に向ひ、下顎の側面にあるものは稍々長い。體色は背部暗灰銀色に蒼青色を含み、体色は銀白色で頭部は体部と比較して稍々黑く紫色を帶びた銀灰色を呈する。

四 銀鱒 O. kisutch (WALBAUM.)

厚岸、根室地方では普通「ギン」と稱してゐる。時々、出漁の流網にかかり、その産額は殆んど無く、全漁期中、數尾の生産に止まつてゐる。其の一般形体は頭部は小さく、体は細長く体高は体長にくらべて小さい。背部は青綠色で體側は銀白色を呈する。背鰭の先端には黑色を帶びた斑點が散在し、脂鰭及び尾鰭の上葉に同樣な斑點を持つてゐる。尾柄は高く尾鰭は叉狀を呈する事なく殆んど一直線である。鱗は稍々大きくて剝離し易い。銀鱒は北方性の鮭鱒で北千島方面に饒産して北海道本島には分布しないとされてゐたが、昭和十二年に岡田稔氏が日高、幌別川及び後志、厚別川より標本を得て本道にも分布する事を明かにした。然し、本種が果して本道或は千島方面の河川に遡上するものがあるかどうかは將來の研究に俟たれる處であろう。（二五・九・二二）

（調査課　技官）

文　献

櫻井基博・江口弘　昭和十三・十四年度厚岸近海に於ける「時不知」漁業竝びに鮭鱒族調査（一九三八復命書）